

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 山崎 藍

本論は中国の古典文献に描かれた厠と井戸を、民俗学的視点から分析し、中国古代の人々が厠や井戸という空間にどのような認識を持っていたかを考察したものである。わが国では、厠神に対する調査・研究は古くから多くの蓄積がある。一方中国の厠信仰に関する研究は、紫姑という女性の神とその来歴を探るものがほとんどであった。山崎氏は六朝・唐代を中心に、厠に関する文献を精査し、中国には紫姑のほかにも多種多様な厠神の記録があり、それらは大別して、出会っただけで人間に死をもたらす恐ろしい神と、それとは逆に富貴を与える神との二種類があるとの結論に達した。これは日本の厠神が、不敬な行為を行わない限り禍をもたらすことのない、穏やかな神であるのとは大きく違っている。また日本の厠神は姿かたちがなく、厠を離れることがないのに対し、中国の厠神は美しい女性や、牙の生えた化け物などのさまざまな姿で現れ、しかも自在に厠を抜け出し、人間の前に出没することを明らかにした。日中の厠信仰の違いをこのように明示した成果はかつてなく、これは本論の大きな功績の一つである。

中国の井戸に関しては、文言小説に描かれる井戸が、この世と異界を繋ぐ境界であることが指摘されている以外、ほとんど研究が行われていない。山崎氏は従来取り上げられたことのない多くの文献をも対象として、中国における井戸観を探求し、さらに先行研究を踏まえ、次のような成果を挙げた。一、井戸の周辺で使われる器具にも注目し、釣瓶は人間の魂の入れ物、それを上下させる轆轤は、人の運命をもてあそぶものという象徴的意味をもつことを明らかにした。二、唐代・元稹の詩「夢井」に「井をめぐる」という語が二度現れることを端緒として、ものの周囲をめぐるという行為の民俗学的意義を考察し、中国では先秦時代から現在まで、死者を安置した棺、または墳墓の周囲をめぐり、死者を弔うという習俗が途切れることなく行われてきたという事実を明らかにした。三、以上の成果を詩歌の解釈に応用し、元稹「夢井」と李賀「後園鑿井」については、新たな解釈を提起するとともに、これまで多くの論争が行われてきた李白「長干行二首」其一については、井戸に関わる民俗や、婚姻儀礼においても行われる旋回という行為に基づき、より実証性の高い一つの解釈を示した。

中国では古来、詩は作者の社会に対する感慨を吐露する場であると考えられてきた。詩歌は作者の生涯の事績と当時の社会状況をもとに解釈され、民衆的な習俗との関連は、民歌に倣って作られた少数の例を除き、殆ど考慮されることがない。山崎氏の研究は、それらの習俗に着目することで、中国古典詩歌の新たな風貌を明らかにし、そこに込められた感慨をより正確に理解する手段をも示したものである。

本論は収集した資料の量に比して、その分析に時として不十分な点があり、詩の解釈についてはなお検討の余地があるものの、斬新な発想で、大量の文献を丁寧に読み解き、多くの新知見を提出するにとどまらず、中国古典研究に新たな領域が開かれる可能性をも示したという点で、その意義はきわめて大きい。よって本審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するものと判断する。